

カッシーラーのシンボル理論と感覚の空間性

山村浩*¹

Cassirer's theory of symbolism and spatiality of sensation

Hiroshi YAMAMURA

Abstract

Cassirer identified that given sensory conditions have symbolic functions even if at a glance they seem to be unrelated to other things. When this type of argument is applied to the phenomenon of the *ganzfeld* (entire field), it becomes apparent that perceptions in the *ganzfeld* symbolize 'the outside world in general'. Thus, perception has a symbolic function even for undifferentiated visual experiences like the *ganzfeld*. However, intentional notice can be directed to more than physical objects, which are symbolized by sensations, and it can even be directed at sensation itself. There is a graded transition that exists between these two types of intentional notice. If the notice given to sensation increases, the notice given to physical objects decreases in an inversely proportional manner. In this way, sensation itself can be considered to exist 'outside' of the perceiver, similar to the existence of physical objects. The abovementioned circumstances are closely related to the spatiality of a priori perceptual experiences.

1. はじめに

当論文は、感覚における分節度というカッシーラーの議論を出発点にしつつ、感覚の空間性および自我との関係について論じるものである。論考の企図は、感覚の空間性を「感覚的分節度」というカッシーラーの議論に結びつけることで自我との関係において捉え、次回以降に予定している一連の論考の端緒とすることにある。したがって論考全体は、カッシーラーのテキスト解釈というものではなく、筆者が今後予定している一連の哲学的論考の「緒論」というべきものとなっている。

2. 感覚的分節度

カッシーラーは、「要素的な感覚与件」という考え方を祖上に上げつつこう述べている。「それ(=要素的な感覚内容)も、孤立し分離されたものとして単に〈そこにあ

る〉わけではなく、まさにそこにあるということの内に、自分自身を超えたものを指し示している。それは現前(Präsenz)と再現前化(Repräsentation)との具体的統一なのである。」¹⁾ここで「現前」による「再現前化」作用としてとらえられているもの、これがカッシーラーによって「シンボリック」と呼ばれる関係である。たとえば言語を例にとると、個々の語はさしあたり「音」として与えられるわけだが、同時にそれは語の「意味」を示している。「音としての語」が「現前」であるとしたら、「語の意味」は「再現前化されるもの」である。かかるシンボル化作用の内に人間の精神活動全般を位置づけようとするのが彼の哲学体系の企図なのだが、上に引用した(要素的な感覚理論への)批判は、まさにそうした文脈の中に置かれているのである。

カッシーラーの議論をもう少し詳しく追ってみよう。かりに「孤立し分離された」要素的感覚なるものが存在するとしたら、それは複雑な知覚像を構成するための素材、いわば絵画における絵の具のようなものということになる。

絵の具はそれ自体として何かを表しているわけではない。それはカンヴァスの上で線や面として構成されて初めて、人物や静物、風景などの像を表現する。同じように「要素的な感覚」も、それが「素材」であるかぎり他の何かを表示することはできない。つまり再現前化作用を持つことはない。

だがカッシーラーは、「素材」としての感覚、再現前化作用を持たない要素的な感覚というものを否定し、どれほど「要素的」と見えるものでも、実際には再現前作用を持っていると主張するのである。

まず彼が、複数の感覚（嗅覚、触覚、視覚など）を分節の度合いという観点からとらえていることから見ていこう。「意識がより豊かで高次の形態化へと進むにしたがって、この統一体もますます明確で鮮明な刻印を帯びてくる。[……]このような進行を考慮に入れつつ個々の感覚領域を互いに比較するならば、そこにはある種の段階構造が確認される。そこには、比較的不明確なものからより高度な明確さへ、より高度な直観的『区別』へと向かう順序が認められるのである。」²⁾ こうした「順序」の低次の段階にあるものとして、カッシーラーは嗅覚を挙げている。嗅覚は視覚や聴覚などと比べると感覚としての分節度が低い。たとえば色ならば赤や黄、青などのように区分できるし、音ならばド、ミ、ソの音という風に聴き分けることが可能だが、嗅覚の領域はこのような明確な線引きができない。一つの匂いから別の匂いへの移行はつねに連続的であり、その差異を明示的に対象化することはできない。嗅覚は分節度の低い感覚なのである。

感覚における分節の度合いは、嗅覚から触覚、聴覚や視覚へと上昇してゆく。しかし最高度の分節度を示すとされる視覚の領域においても、その度合いは一樣ではない。視覚の中にも分節度の高いものと低いものがある。この点についてカッシーラーは、D. カッツらの色彩理論を引きつつ説明している。³⁾ 色彩は、物理的な特質（波長の性質）だけでなく、現象的な見え方によっても分類できる。たとえば彩度や明度が同じ赤色でも、面色（*Flächenfarbe*）として見えたり、表面色（*Oberflächenfarbe*）として見えたりする。面色とはプリズムを通して分離した光線をスクリーン上に映すときに現われるような色である。それは、たとえば中空にかかる虹のように、特定の物体に定位されおらず、知覚主体からの距離が不明であるという特徴をもつ。一方の表面色とは物の表面の色のことで、物体の表面と一体化しており、見るものからは特定の距離をもつものとして知覚される。

面色は表面色より分節度が低く未分化である。面色においては（たとえばプリズムの分離光のように）光と色が渾然一体となっているが、一方表面色では、色と光が別々のものとして知覚されるからである。つまり表面色においては、色は物体表面の性質として知覚され、光は照明光というかたちでそれを照らし出している。むしろ表面色といえ

ども、物理学的には物体表面が反射するさまざまな波長の光線に過ぎない。だがその「光線」は、現象的には「光」とは感じられず、あくまでも物体表面の性質として知覚される。ゲシュタルト心理学の用語でいえば「地」としての照明光、「図」としての物体色という風に、色と光とが分化しているのが表面色の特徴である。

表面色と照明光の分離ということは、色彩の恒常性という現象を通して観察できる。強い直射日光の下に置かれた黒色の紙と、弱い室内光の下に置かれた白色の紙を比較したとき、光の反射量自体は前者のほうが後者よりも多い。したがって物理学的な観点からは、前者は後者より「白く」見えるはずである。にもかかわらず私たちは、前者を「黒い紙」、後者を「白い紙」として知覚する。これは私たちの視覚が、紙が反射する光線を、表面色と照明光というかたちで分離し、表面色として紙の表面にその「固有の色」を見るからである。紙が反射する光の総体は、物理学的にはたしかに前者のほうが後者よりも多いかもしれないけれど、そこから照明光の分を差し引くと、紙に「固有の色」だけが残るというわけである。このようなメカニズムを通して、黒い紙は直射日光の下でも黒い紙として、白い紙は室内光の下でも白い紙として知覚される。面色の知覚ではこのような事態は起こらない。たとえば夕焼けの茜色は面色的色彩であり、光と色が未分化なまゝ渾然一体となっている。だから夕焼けでは、日が沈みゆくにつれて夕焼けの色自体が変化するのである。

それでは面色と表面色をシンボリックな関係においてとらえるとうどうなるだろうか。表面色においては、色彩という「現前」が物体表面という存在物を「再現前化」しているので、両者の間にシンボリックな関係が成り立っているのは明白である。それでは面色についてはどうか。カッシーラーによると「色の〈還元〉をどれほど行なっても——色からその表示的な性格を、つまり空間的および対象的なものを再現前化する値をどれほど剥ぎ取ってみても——、それがあらゆる直観的分節を欠いた単なる〈感覚されたもの〉となる地点まで遡ることは決してできない。」⁴⁾ 「最も還元を行なった色」とは、言うまでもなく「面色」のことであるが、それが単なる〈感覚されたもの〉でないというのはどういうことなのだろうか。

カッシーラーは、何ら事物を表示していないような孤立的な面色でも、それが複数個存在していれば、相互に差異的な関係を形成するという。したがってそこには何らかのシンボル化作用が働くであろうことが予想される。⁵⁾ その一方で彼は、シンボル化作用はたった一つの面色が与えられた場合にも認められると述べている。というのも「たとえば、今ここにおいて与えられている瞬間的個別的な赤色は、自分自身をわれわれに委ねるだけでなく、「一つの」赤色として、それによって代表される一つの種の見本としてもわれわれに意識される」からである。⁶⁾ つまりこの場合、与えられた赤い面色が「現前」であるとしたら、それ

は〈赤〉という色彩カテゴリーを「再現前化」しているのである。孤立した個別の色彩（面色）も、色彩カテゴリーという「自分自身を超えたもの」を再現前化しており、シンボリック関係が存在しているというわけである。

しかし実をいうと、カッシーラーのように色彩カテゴリーなどというものを持ち出さないでもシンボリックな関係を認めることは可能である。たとえば全体野（Ganzfeld）というものを考えてみよう。全体野とは何ら差異性をもたない等質的な知覚空間のことであり、そこではあらゆる物体性が消失し、面色状の霧のようなものが広がる。⁷⁾なるほどそこに現れる「面色状の霧」は何らの事物も表示（再現前化）していない。だが、少なくともそれは私の向こう側に広がる「三次元的な空間」の存在を示唆してはいる。それは距離も奥行きも定かでない漠たる拡がり過ぎないが、少なくとも「外界」という存在性格だけは備えている。シンボル化作用は全体野のような、感覚の原基的なシーンにおいても認められる。その意味でも要素的なしは孤立した感覚与件という考え方は否定されるべきなのである。

3. 感覚における分節度と志向的注意

シンボリック構造が視知覚の最も未分化なケースでも存在するという事は、単にカッシーラーのシンボル理論の妥当性を証明するだけでない。それはさらに別の視点を私たちに与えてくれる。

全体野のようなものに現れる未分化な感覚は、対象的事物には定位されていない。その意味でそれは「感覚内容それ自体」というべきものである。が、それが未規定的な外的空間一般を表象しているとすると、具体的な事物を表象する感覚（たとえば表面色）との間には原理的に差異は存在せず、違いはシンボリック表象作用における分節度の高低だけということになる。つまり空間一般という未規定的なものを表示しているのか、それとも対象的事物という規定的なものを表示しているのかという違いである。また、そうした意味での「感覚内容」は、必然的に自我外在的なものということになるだろう。

以上のような論点を今少し立ち入って検討してみよう。原初的な視覚体験としての全体野の研究は、もともとゲシュタルト心理学の分野で始められたものである。したがってそこでは、未分化な感覚の分節の契機として「図と地の区分」というものに焦点が当てられている。これに対してカッシーラーは、むしろ物的対象への定位ということの問題とする。表面色において色彩は物体表面に定位されているが、面色ではそれが無いのである。⁸⁾そこでこの「物的対象への定位」というカッシーラーのテーゼを、視覚以外の感覚にも敷衍してみよう。

まず、カッシーラーが最も未分化な感覚として挙げている嗅覚を考えてみよう。私たちは匂いというものを、第一

義的には「それ自身として」知覚する。匂いの物質は空気中に拡がっており、嗅覚器官はその不特定の拡がりを対象化しつつ感知する。その一方で私たちは、匂いの発生源にも志向的なまなざしを向けている。すなわち嗅覚は、匂いそのものを対象化しつつ、匂いの発生源をも志向的に対象化している。ただしこの場合、匂いの発生源は（少なくとも嗅覚を手掛かりにするだけでは）はっきりとは特定できない。あるいは仮にその発生源が分かっても、その位置を空間的に定位することは困難である。

これを通常の、つまり表面色による視覚体験と比べてみよう。するとそこに興味深い対比が認められる。表面色は具体的な事物に定位されており、匂いのように「それ自体として」対象化されることはない。色は物体表面の「性質」であり、「感覚そのもの」は素通りされ、物的対象が直接的に志向される。その際に注目すべきなのは、視覚における物的対象の定位が、嗅覚とは比較にならないくらい明確だということであろう。私たちは何かを「見る」とき、対象が「何」であり、またそれが「どこ」にあるのかを知っている。

次に聴覚についてはどうだろうか。聴覚は視覚と嗅覚の中間に位置するといえる。私たちはたとえば車のエンジン音を、「音自体」として対象化する一方で、音を通して車の存在へと志向的なまなざしを向ける。その点では視覚よりは嗅覚に近いけれど、音の発生源は匂いの発生源よりも特定が容易である。つまり嗅覚だけで匂いの発生位置を知るのは困難だが、音の発生位置はかなりの程度まで認知可能である。他方、感覚そのものへの志向的注意は、聴覚は嗅覚よりも低い。音（の波動）も匂い（の分子）と同じように空気中に拡がっているわけだが、匂いの場合には「空間中の匂いの拡がり」を対象化しつつ感知するけれど、音の場合にはそうしたことはしないのである。

最後に触覚においては、第一義的には物的対象への注意が前面化しており、感覚そのものが単独で志向的注意の対象となることはない。「手触り」とはつねに何らかの物体表面の「手触り」であり、その意味で触覚は物的対象と不可分のものである。

以上の考察から分かることは、〈物的対象〉と〈感覚それ自体〉という二つのものの間に、志向的注意の段階的推移が存在するという事である。感覚そのものへ向けられる注意の度合いが高まれば、それと反比例するようにして物的対象への注意は後退する。逆に物的対象への注意が前景化すれば、感覚そのものに対する注意は後景へと退く。全体野における視覚体験は前者の、触覚や表面色の知覚は後者の、それぞれ極限的なケースであるといえよう。

さきに私たちは、「感覚内容そのもの」と「事物の性質としての感覚」との間には、表象作用における程度の違いがあるだけだと述べた。しかし志向的注意についての考察を経てきた今、そうした命題をより正確に言い直す必要があるだろう。

表面色において私たちは、色彩を物体表面の性質とみなすけれど、全体野においては「霧状の光」を空間の性質とみなしはしない。つまり表面色においては「事物」が志向的注意の対象になっているが、面色（全体野における面色）においては志向的注意の対象は「感覚」のほうである。どちらのケースでもシンボリック関係が存在するが、志向的注意のウェイトは同じではない。つまり面色では「感覚＝現前化するもの」が前景化しているが、表面色においては「事物＝再現前化されるもの」が前景化している。

感覚とは両義的な存在である。感覚はそれ自体が志向的注意の対象であるとともに、他の物的対象を表象してもいる。そこでは志向性は、感覚そのものと物的対象という二つの極をもち、全体野から嗅覚、聴覚、そして（通常の）視覚や触覚へと移るにつれ、感覚それ自体から物的対象へとウェイトを移行させる。全体野において注意は感覚そのものだけに向けられているが、通常の（つまり表面色による）視覚体験においては、感覚そのものへの志向的注意は零度に到達し、いわば「透明化」する。視覚体験における「感覚そのものの位置づけ」が難しいのはそのためであるが、「感覚そのもの」への志向的注意は、事実的には存在しないように思えるケースでも権利的には存在している。そうした意味において、視感覚は決して「主体の内なるもの」ではないし、知覚主体の「主観的な状態」とも異なる。あるいはこうも言えるかもしれない。「感覚それ自体」とは「物の性質」の未分化な状態であり、「物の性質」はまた物的対象に定位された「感覚」にほかならないのだと。

4. バークリの視知覚理論について

知覚主体にとっての感覚の外在性は、知覚体験の空間性ということと密接に結びついている。感覚はアприオリに空間的である。二次元的な網膜像から三次元的な立体像が脳内で「構成」されるわけではないのである。⁹⁾ たしかに視知覚理論においては、さまざまな奥行き手がかりというものが研究されてきた。しかし視知覚がアприオリに空間的であるということ、知覚主体がどのようにして奥行き距離を見定めるかということはおのずと別の問題である。実際、全体野などというものを持ち出さずとも、奥行き距離が不分明な知覚対象などというものは、日常的にいくらかでも存在している。

空間的な奥行きの知覚が「経験」を通して獲得されるのではなく、むしろ直観のアприオリな形式であることは、すでに『純粋理性批判』のカントが述べていることであるが、ここでは奥行き構成についての議論を、バークリの視知覚理論に即して検証してみたい。

バークリによれば、「奥行き」の観念は視覚にアприオリのものではなく、触覚由来のものである。視覚の初次的な与件は「光と色」だけであり、¹⁰⁾ それが触覚的な奥行き

性と結びつくことによって、三次元的な知覚空間が成立するというのである。

が、奥行き性をもたない「光と色」とはいったい何だろうか。私たち動物は身体をもち、空間内部を動き回る存在者である。そのような存在者にとって、奥行きをもった「空間」の観念は「アприオリ」でなければならないはずである。アприオリとしての空間性を認めないならば、身体そのもののアприオリ性を否定することにもつながるのではあるまいか。

はたしてバークリは「身体なき精神」という有名な思考実験において、仮に身体をもたない知性体のごときものが存在するとしたら、それは空間概念のみならず二次元的な幾何学概念さえ持ちえないだろうと述べているのである。¹¹⁾ おそらくこの結論は正しい。身体をもたない存在者が外的空間についての表象を所有できるはずはないからである。問題はそのような知性体が、はたして私たちと同じように光や色を知覚できるのかということであろう。というのも、仮に私たちが身体を持たず、それゆえ空間の中を移動することもできないとしたら、そのときに持つであろう「感覚」は、今の私たちのそれとはまるで別のものになってしまうと考えられるからである。

バークリが「身体なき精神」に固有の感覚と見なしている「光」と「色」について考えてみよう。光は、照明するにせよ放射するにせよ、空間の内部において作用する。だとすると空間概念をもたない存在者は、いったいどのようにして光を光として認識するのだろうか。仮にその存在者が、何らかのかたちで光の波動エネルギーを感知できたとしても、そのように捉えられた光エネルギーは、「見る」という仕方とは全く違うかたちで表象されるのではあるまいか。「身体なき精神」は光を「見る」ことはできない。

それでは色についてはどうだろうか。すでに述べたように色彩は、面色として現れるか表面色として現れるかのいずれかである。¹²⁾ 面色においては光と色が未分化である以上、光を知覚できない知性体は面色も知覚できない。他方表面色は物体表面に定位される色彩だが、この知性体は空間概念をもたないから、空間内部の「面」を知覚できず、したがって面色も知覚できない。

いずれにしても「身体なき精神」は光も色も「見る」ことができない。バークリのいうような「光と色の多様」がこの知性体に与えられることはないのである。

私たち動物は空間内部を動き回る存在者である。外的空間は可能的な移動の「場」であり、その限りにおいて空間性についての観念は「アприオリ」である。それは原基的には未分化なものとして与えられ、¹³⁾ そのような初次的空間は、身体と感覚器官の協調によって分節され、高度に組織化されていく。¹⁴⁾

要するに二つのものをはっきりと区分して考えねばならないのだ。一つは感覚がアприオリに空間性を備えているということであり、もう一つはそうした空間性が、身体と

感覚器官との協調によって分節され、明確な構造を備えた三次元知覚空間へ分化してゆくということである。いわゆる奥行き手がかりが問題となるのは後者のレベルにおいてなのである。

5. 結語

ここまで私たちは、感覚の分節度をめぐるカッシーラーの議論を出発点に、それを志向的注意のウエイトという観点から捉え直し、一方の極に対象的事物を、他方の極に感覚そのものを置くことで、外的事物ともども感覚をも、自我外在的なものとして捉えるという見方を提示してきた。すでに見たように、空間性を直観の第一次的な所与とみなす立場は古くからある。だがこうした考えは「延長をもたない要素的感觉」という古典的感觉概念を必ずしも排除するものではない。これに対して当論考で提示したのは、感覚内容と対象的事物の二つを志向的注意の二極と見なすことで、両者を連続性においてとらえるという考え方である。このような考え方は、古典的な感觉概念と相容れないだけでなく、直観形式としての空間よりも「先なるもの」の存在を示唆する（この点については後述）。同時にそれは、自我と感覚の特殊な空間の関係というものを要請するのだが、まずはこの点について見ることにしたい。

私の自我は「どこに」あるのだろうか。これは、自我が脳のどこに局所化されるのかという、脳科学上の問題ではない。あるいはメルロ＝ポンティが論じたような、身体による外的空間の分節ということでもない。私は端的に、自我が現象的に空間のどこに定位されるのかを問題としているのである。

いま私はパソコンの前に座り、キーボードを叩きながら画面を見つめている。私は特定の視座から、パソコン機器の限られた一面を眺め、射映的な知覚を手に入れている。しかし私の自我は、知覚表象が生起する静的なスクリーンのようなものではないし、表象がその中にすっぽりと収まっている箱のようなものとも違う。実際のところ自我は、それ自体も空間的に定位されているのである。繰り返しになるけれど、ここで問題となっているのは、メルロ＝ポンティ的な「身体図式」ではないし、認識論的な線引きによって「自我」の側に所属させられた「身体」とも異なる。たしかに「身体としての私」は、アフォーダンス的に条件づけられた外界との相互関係の内に置かれている。身体は物理幾何学的な「位置」に置かれているだけでなく、固有の仕方で分節された「状況」を生きている。しかし一方で私は、自分の自我（身体ではなくて）が空間内部の「位置」に存在しているとも感じている。それは具体的には頭蓋の内部、両目の間のやや奥のあたりである。

これはあくまでも現象的なレベルの話である。私は端的に自我がその「位置」に存在しているのを感じる。別の見方をすると、私の身体は私のものであるにしても、だから

といって私の自我が、身体のどこに定位されてもいいというわけではない。私は私の自我が、頭頂や指先、へその下にあると感じることはできないであろう。

むろんそうは言っても、自我が空間内部の一点を「物理的に」占めているというわけではない。自我が存在していると感じるその「位置」は、実際には頭蓋の内部でニューロンやシナプスがひしめいている。自我は実在の空間位置にではなく、空間内部の「虚点」に存在しているのである。「虚点としての自我」は、いかなる意味においても「感覚の位置」とは重ならない。たとえば私は、私の自我が「両目の間のやや奥のあたり」にあると感じているが、かりにその箇所に頭痛を感じたとしても、私は私の自我が痛んでいるとは考えないだろう。自我の存在する「虚点」は、物理幾何学的な「点」とは異なるのである。

このような「虚点としての自我」に対しては、自己受容感覚を含むすべての感覚が「自我との距離」をもっていると考えることができる。たとえば「〈熱さ〉は対象の性質であり、〈痛さ〉は自我の状態だと考えられている。しかし〈熱さ〉の程度を高めていけば、どこかの時点で必ず〈痛さ〉となる。してみれば〈熱さ〉が属しているのは、じつは客体ではなく主体の側なのだ。」というパークリ的な議論に対しては、「〈痛さ〉も〈虚点としての自我〉からの〈距離〉をもっている、したがってそれは、〈熱さ〉と同じように自我の〈外〉にあるものである。」と応じることができる。もちろんこれに対しては、「我々が苦痛を足にあるごとく感ずるとき、それが我々の精神の外に、足のうちに存在する何ものかだということの確かさは、光を太陽にあるごとく見るとき、その光が我々の外に、太陽のうちに存在するということの確かさに比べて、決してまさっているわけではない。」¹⁵⁾と述べるデカルトに倣って、「〈痛さ〉が足にあると思ひこむのは、本来は意識の側にあるものを、無思慮にも対象的事物に帰属させてしまっているのである。」と再反論することも可能であろう。デカルトによれば、味、音、光、色などは「意識内容」に過ぎず、世人は未熟な思い込みから、それらを「対象的事物の性質」と見なしているというのである。

しかしすでに見たように、ある感覚内容が対象に定位される度合いは感官ごとに異なる。また単一の感官においても、分節度の高低というものが存在する。さらに、或る体験内容が意識内在的であることと自我外在的であることは十分に両立しうる。つまり実際には、自我外在的な領域における「内容性」と「対象性」の連続的推移があるだけであって、「意識内容」と「意識対象」の相互排除的な関係があるわけではない。

感覚の空間性および自我外在性というテーゼを正しく理解するには、そのようなものが生じる原基的なシーンを考察してみるとよいだろう。

たった一つの感覚、たとえば振り子時計の音のようなものに意識を集中させてみよう。このことに成功し、爾余の

すべての感覚が意識から消失してしまうと、感覚と自我との距離はかぎりなくゼロに近づく。感覚の空間性は失われ、「私」が音の中にあるのか、それとも音が「私」の中にあるのか区別がつかなくなってしまう。このとき「私」の存在感は、感覚そのものと重なり合っている。すなわち感覚は純粋に自我内在的なものとなっている。

次に私が、四肢のどこかを動かそうと試みたとして、するとたちまち感覚と自我は分離する。それとともに空間性が開かれ、感覚は「自我外在的」なものとして、自我は空間内部の「虚点」として体験されるようになる。このような自我と感覚の分離による「空間性の開示」は、カント的な「直観形式としての空間」に先立つばかりでなく、それを成り立たせている当のものである。そしてそのようにして開かれた空間＝自我外在的な領域において、感覚は「内容性」から「対象性」へと分節の度合いを高めていく。当論考で述べてきた「感覚の空間性」とは、そのような種類のものなのである。

以上、かなり長くなってしまったが、当論考で扱ってきた内容に別の観点から光を当ててみた。上に述べたような問題は、さまざまな哲学的問題とも関連している。当論考は一連の論考の「緒論」というべきものなので、いずれ別の箇所でもそうした関連に触れるつもりである。

註

- 1) E. Cassirer, Philosophie der Symbolischen Formen (3. Teil), in: Gesammelte Werke Hamburger Ausgabe, Hamburg, Felix Meiner Verlag, 1998-2009, Bd. 13, Hamburg, 2003, S. 143.
- 2) A. a. O., S. 143-144.
- 3) A. a. O., S. 146 ff.
- 4) A. a. O., S. 151.
- 5) Ebd.
- 6) A. a. O., S. 151-152.
- 7) ただし全体野の実験では、視野の等質性という条件が完全に満たされれば色彩感覚そのものが喪失し、視界は明暗のみの霧状のものとなる。Vgl. 大山正, 今井省吾, 和気典二編『新編 感覚・知覚心理学ハンドブック』誠信書房, 1994年, 607頁.
- 8) 両者の違いは知覚状況の物理的相違によってだけ生じるのではなく、知覚主体のまなざしの「構え」によっても

生み出される。たとえば画家は、ふつうは表面色として見えている色彩を、あえて面的に見ることを試みたりする。モネの描いたルーアンの大聖堂は、石の表面色とそれを照らす照明光とが分離していない。そこでは光と色が渾然一体となったものとして描かれている。面的な「見え」は外的知覚状況のみならず主体のまなざしの「構え」によっても作り出されるのである。

- 9) Vgl. W. Metzger, Gesetze des Sehens, Frankfurt a. M., Waldemar Kramer, 1953, S. 260 ff.
- 10) G. Berkeley, An Essay towards a New Theory of Vision, in: George Berkeley Philosophical Works, London, Dent & Sons, 1975, p. 38.
- 11) Ibid., P. 53 ff.
- 12) 面色や表面色のほかに空間色というものもあるが、空間概念を持たない知性体は当然、空間色を知覚できないであろう。
- 13) たとえば開眼手術者がはじめて目にする空間とは、そのような未分化な「外界一般」と考えられよう。Vgl. M. von Senden, Raum- und Gestaltauffassung bei operierten Blindgeborenen vor und nach der Operation, Leipzig, Johann Ambrosius Barth, 1932.
- 14) フッサールがキネステーゼという概念を用いて記述したのは、このような事態である。
- 15) デカルト, 桂寿一訳『哲学原理』岩波書店, 1964年, 101頁.

文献表

- Berkeley, G. (1975): An Essay towards a New Theory of Vision (George Berkeley Philosophical Works), Dent & Sons, London, 358pp.
- Cassirer, E. (2002): Philosophie der Symbolischen Formen (3. Teil), Gesammelte Werke Hamburger Ausgabe, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 598pp.
- デカルト (1964): 哲学原理 (桂寿一訳), 岩波書店, 東京, 217pp.
- Metzger, W. (1953): Gesetze des Sehens, Waldemar Kramer, Frankfurt a. M., 470pp.
- 大山正, 今井省吾, 和気典二編 (1994): 新編 感覚・知覚心理学ハンドブック, 誠信書房, 東京, 1741pp.
- Senden, M. (1932): Raum- und Gestaltauffassung bei operierten Blindgeborenen vor und nach der Operation, Johann Ambrosius Barth, Leipzig, 303pp.

要 約

カッシーラーは「要素的な感覚与件」という考え方に対して、一見したところ他のものとは関係を持たないように見える感覚与件でも、実際には孤立した存在ではなく、再現前的（表象的）な機能を担っていると指摘する。彼は感覚を、分節度の高さという観点から分類する。その上で、分節度の低いものでも「要素的な感覚」とは言えず、おのれ以外のものを表象しているのだと述べる。以上のようなカッシーラーのシンボル理論を全体野という現象に適用してみると、全体野における面色が「外界一般」を表象していることが分かる。全体野のように未分化な視覚体験でも、感覚は表象作用を担っているのである。一方で感覚は知覚主体の「外部」に、志向的对象として存在している。感覚は「主体の内なるもの」ではないし、またその「主観的な状態」でもない。このような事情は、知覚体験のアプリオリな空間性ということとも密接に結びついている。